

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3547号 2017.3.8 発行

愛媛) 障害者の版画詩、集大成の作品集 元園長が出版 藤家秀一

朝日新聞 2017年3月7日

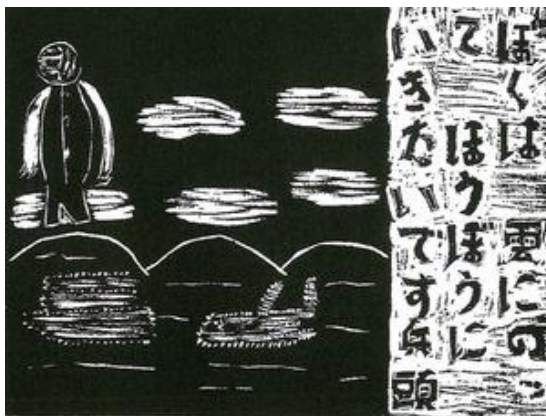


宇都宮久男さんの版画詩「なかのおやぶん」

西予市の知的障害者支援施設「野村学園」の園生たちが、約40年前から取り組んでいる版画詩の秀作を集めた作品集が出版された。「版画詩どろんこのうた 生まれたてのことば」(A5変型判 224ページ)。かつて園の職員として制作を見守り続けてきた男性が、集大成としてまとめた。



作品集を作ったのは、元園長の仲野猛さん(75)。園が創立された1966年に職員となり、2002年まで勤めた。親元を離れて寮生活を送る子どもたちと寝食をともにしながら、社会参加や自立を目指した学習や生活支援、散歩や詩作などに取り組んだ。



園の詩作は当初、仲野さんら職員が子どもたちのつぶやきを書き留める口述詩から始まった。72年には粘土遊びの際に針金で落書きした子どもの言葉を陶板詩にした。さらに表現力を伸ばそうと、75年からは板に詩と

挿絵を彫る版画詩の形式になった。作為のない表現と素朴な版画は、作曲家の池辺晋一郎さんらから高く評価され、園が77年から手がける版画詩カレンダーは根強い人気がある。

高齢者や障害者がステージ、出店 佐賀で催し 読売新聞 2017年03月07日



多くの人でにぎわった会場

高齢者や障害者が出演、出店するイベント「いきいきフェアさが」が4日、佐賀市呉服元町の656広場で開かれた。

市シルバー人材センターと、NPO法人佐賀中部障がい者ふくしネットの共催。催しを通じて社会参加を促そうと、市内で開かれている「佐賀城下ひなまつり」に合わせて昨年からはじめた。

会場のステージでは、フラダンスなどが披露され、手作りのパンや小物入れなどの販売もあり、多くの家族連れらでにぎわった。

ふくしネットの福島龍三郎事務局長（44）は「やりがいを持って生き生きと働く障害者らの姿を、多くの人に知ってもらえれば」と話していた。

「サイバスロン」2人が意義強調 どうしん☆スポーツサロン



北海道新聞 2017年3月7日

サイバスロンで使用した車いす型の自転車について解説する猪飼さん（右）と、最新義手による競技について説明した前田さん

障害者スポーツの実情を知ってもらう第7回どうしん☆スポーツサロン（北海道新聞社主催）が6日、札幌市中央区の北海道新聞社1階・道新プラザDO—BOXで開かれ、新技術を用いた義手などで競技する国際大会「サイバスロン」に出場した札幌の2人が大会の意義などについて講演した。

サイバスロンは、医学や工学技術で障害者の機能を拡張して日常的な動きのスピードを競う。昨年10月に第1回大会がスイスで開かれ、6競技に25カ国80チームが参加した。脊髄損傷で感覚がない下肢を電気で動かし、自転車レースをした猪飼嘉司（いかいよしつぐ）さん（47）は「20年間動かなかった足が

動いた。スポーツと科学技術の融合を感じた」と語った。

肘先の筋肉の微弱電流を検知し、指の細かな動きを実現した義手で物の持ち上げなどに挑戦した前田和哉さん（30）は「(事故で失った)右腕が戻ったような気になった。新技術による身体機能のアシストは障害者の社会参加につながる」と、サイバスロンの意義を強調した。

障害者アルペンスキーW杯、日本が男女優勝 平昌へ弾み 朝日新聞 2017年3月6日



スーパー大回転の第2戦、男子座位で優勝した森井大輝＝竹谷俊之撮影

長野県白馬村で6日にあった障害者アルペンスキーのワールドカップ（W杯）で、日本代表が男女ともに優勝した。1年後に迫る平昌パラリンピックに向け、弾みをつけた。

天候不良のため大会期間が短縮され、この日はスーパー大回転の第1戦、第2戦が続けて行われ

た。雪質が悪く、多くの選手がスキーのコントロールに苦しむ中、第2戦で、男子座位で森井大輝選手（36）が、女子座位で村岡桃佳選手（20）が、それぞれ優勝した。

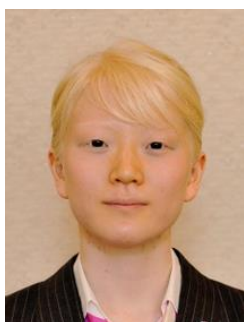
パラリンピックに4度出場経験のある森井選手は「有力選手の故障もあったので手放しでは喜べない。世界のレベルは上がっているのでも、自分もワンステップずつ上げていきたい」と気を引き締めた。村岡選手は、第1戦でも2位。「今季初優勝で自信になったけど、実力はまだまだ。パラまで時間がないので無駄にしないように練習に励みたい」と話した。

この他、第1戦で三沢拓（ひらく）選手（29）が男子立位3位、狩野亮（あきら）選手（30）が男子座位3位、第2戦で鈴木猛史選手（28）が男子座位3位に入った。

日本代表選手たちは今月9日から平昌で開かれるW杯最終戦に挑む。（斉藤寛子）

障害者スポーツの魅力、現役選手が講演 11日 神戸新聞 2017年3月7日

笠本明里選手



リオデジャネイロ・パラリンピックの競泳視覚障害クラスに出場した神戸市内在住の笠本明里（あかり）選手（31）＝大塚商会＝が11日午後1時半～3時、中央区磯上通3のこうべ市民福祉交流センターで障害者スポーツの魅力について講演する。

市社会福祉協議会が開く「市民福祉大学」のセミナー。2020年の東京パラリンピックに向け、企画した。

笠本さんは神戸生まれ。先天性色素欠乏症による視覚障害があり、2歳から水泳を始めた。初出場だった08年の北京パラリンピックでは、100メートル背泳ぎで7位に入賞した。

笠本さんは講演で、競技で得られた成果やその魅力を話す。会場には「ボッチャ」や「ゴールボール」で使われるボールや器具のほか、車いすバスケットボール用の車いすなどが展示される。千円、申し込みは不要。同大学TEL078・271・5300（貝原加奈）

安倍晋三首相、手話交え答弁 障害者スポーツ大会「デフリンピック」日本選手団への応援呼びかけ「よろしく」 産経新聞 2017年3月6日



平成29年度予算案について、無所属クラブの薬師寺道代氏の質問に手話を交えて答弁する安倍晋三首相＝6日午後、国会・参院第1委員会室（斎藤良雄撮影）

安倍晋三首相は6日の参院予算委員会で、7月にトルコで開催される聴覚障害者のスポーツ競技大会「デフリンピック」の日本代表選手団に対する応援を呼びかけ、手話で「よろしくお祈いします」と表現した。

無所属クラブの薬師寺道代氏が手話を交えて選手団への応援を求めたのに応じた。首相は「選手たちが困難を乗り越えて競技に臨み、夢を実現するという不屈の精神が大きな夢と感動そして勇気を与えてくれる」と述べ、選手団の活躍に期待を寄せた。

首相は昨年10月13日の参院予算委でも、手話を交えてデフリンピックの日本開催招致を求めた薬師寺氏の質問に対し「薬師寺氏に取り上げてもらい、デフリンピックに対する知名度、理解も進んだと思う」と述べ、手話で「うれしい」を表現するポーズを取りながら「私も大変うれしく思う」と応じていた。

措置入院など判断の審査会 要件満たさず開催 読売新聞 2017年03月07日

道は6日、精神障害者を強制的に入院させる「措置入院」の継続や退院などの妥当性を判断する道の精神医療審査会が2015年度、開催要件を満たさないまま4回開かれ、計

432件を審査したと発表した。道は改めて審査し、「審査結果が変更になる事例はなかった」としている。

精神保健福祉法は、審査会の構成は医療委員（精神保健指定医）、保健福祉委員（精神保健福祉士など）、法律委員（弁護士など）の3分野の5人と規定。開催も、各分野1人以上の出席が必要としている。

発表によると、厚生労働省から全国調査の通知を受けた道立精神保健福祉センターの調査で、15年8～12月に開いた審査会4回が開催要件を満たしていないことがわかった。道障がい者保健福祉課は「法令の認識が不十分だった」と説明。委員への出席確認の徹底や予備委員の増員といった対策を講じるという。

福祉用具 優しい工夫満載 県バリアフリー賞 部門最優秀に2点

中日新聞 2017年3月7日

(上) 家具調の見た目の「流せるポータくん2号」(下) 洗浄暖房便座を付けられる「流せるポータくん3号」=いずれもアム提供
流せるポータブルトイレ



県バリアフリー社会推進賞の表彰式が六日、県庁であり、七人十団体が受賞した。お年寄りや障害者の自立支援などを図る創造的な作品をたたえる福祉用具部門では、後片付け不要の水洗式ポータブルトイレなど工夫を凝らした用具二点が最優秀賞に輝いた。(福岡範行)

トイレは仮設トイレの製造販売レンタル業「アム」(津幡町)が開発し、販売、レンタルしている「流せるポータくん2号・3号」。便器から延ばしたホースを下水管などにつないで水で流す。電動ポンプを使うため、床下を通す工事をしなくても窓などの好きな場所にホースを通すことができ、トイレの設置場所はベッドそばなど柔軟に選べる。

一般的なポータブルトイレはバケツに排せつ物をためる方式で、定期的に片付けが必要となり、臭いも出やすいが、これらの課題はポータくん改善できる。新保昌貴専務は「誰かに排せつ物を片付けてもらう気兼ねもなくなる。受賞を励みに、もっと利用を伸ばしたい」と語った。

さまざまなものに取り付け可能な「いっしょにあそぼ。どこでもテ〜ブル」=県提供

どこでも使えるテーブル

もう一つの最優秀は、金沢こども医療福祉センターの作業療法士可長(かちょう)京子さんが作った「いっしょにあそぼ。どこでもテ〜ブル」。センターに通園する姿勢を保ちづらい障害児向けの製品で、ベビーカーなどに取り付けて本を置く台などに使える。乳幼児を前向きに抱いたままテ〜ブルを大人の腰に固定して一緒に本を読むこともでき、障害のない子どもにも活用できる。

谷本正憲知事は「バリアフリーという考え方は世の中の常識になってきた」と語り、受賞者の先進的な取り組みをたたえた。

◇そのほかの受賞者、団体(かっこ内は受賞対象)【施設部門】最優秀 石川トヨタ自動車、山岸建築設計事務所(石川トヨタ自動車金沢西店)▽優秀 能美市、コスモ計画設計



(大成保育園)

【活動部門】最優秀 平野友明▽優秀 車いす目線から巡る七尾の旅・2015▽奨励
全国パーキンソン病友の会県支部

【福祉用具部門】優秀 大北岩(リモコン安全操作器具) 高松外美子(よだれ・ガード)
▽奨励 高田隆二(水やりとうばん) 荒木茂(かみぶれす1号・2号) 松本忍(ベッド転
落予防感知装置) 川端鉄工所(くるっとカチットヤマハJWX-1用) 金沢工業大FMT
研究所(起立着座動作支援装置) 大和(食のユニバーサルデザイン)

巨体、轟音...来た！ 中部空港見学、好評

読売新聞 2017年03月07日

離着陸を間近で見られる滑走路脇の見学スポット

◆滑走路 間近で



中部国際空港(常滑市)が行っている有料の「セント
レアまるわかりツアー」が2005年の開始以来、参加
者が約26万人を数える人気となっている。特に、滑走
路など立ち入りが厳しく制限されている区域を見学でき
るツアーのコースは、土日祝日を中心に3、4月はほぼ
予約で埋まっている状況だ。同空港会社の担当者は「離

着陸する飛行機を間近で見られるのは珍しい。普段見られない場所を見学できるのが好評
だと思う」と話す。(倉橋章)

国内線や国際線の飛行機が轟音とともに離着陸を繰り返す。「来た、来た。飛行機」「す
ごい音。迫力があるね」――。

今月4日午後、名古屋市天白区の知的障害をもつ子どもとその保護者、支援者らでつく
る「天白区手をつなぐ育成会」の38人がツアーを行った。中部空港の滑走路から約10
0メートル離れた場所に設けられたフェンスに囲まれた見学ポイント(幅15メートル、
奥行き4・5メートル)では、飛行機が離着陸するたびに歓声が上がった。同会会長の富
岡喜代美さん(59)は「子どもたちが喜んでくれて何より。離着陸するときのエンジン
音はすごい音ですね」と驚いていた。

ツアーは開港した年の2005年5月に始まった。当初は専属ガイドと旅客ターミナル
ビル内を歩いて見学するコースのみだったが、参加者の要望で、09年に滑走路見学コ
ースが新設された。10年からはバスから降りて飛行機の離着陸を見られる見学ポイント
を加えた。14年には見学者20万人を達成し、現在は約26万人に上る。

同空港会社広報担当の坂本裕宣さんは「制限区域内に見学バスを走らせたり、滑走路脇
に見学ポイントを設けたりするのに、準備に約2年かかった」と振り返り、「多くの方に空
港や飛行機を見てもらい、地域に愛される空港を目指したい」と話した。

滑走路見学コースは1日3回(年末年始を除く)で見学時間は1時間半、料金はバス1
台4万1000円、バスは自分たちで用意する。個人の場合はバス会社主催のツアーに申
し込む。ツアーの問い合わせは、「セントレアまるわかりツアー」(0569・38・7575)。

記念の40回目 障害児者のつながり文化祭

わかやま新報 2017年03月06日

第40回「障害児者家族のつながりを広める文化祭」が5日、和歌山市中之島の県立体
育館で開かれ、大勢の家族連れらがバザーや模擬店、ステージ発表を楽しみ、交流を深め
た。

同市を中心に、24の福祉施設や支援学校などで行う実行委員会が主催。障害者、家
族がつながり、互いを知る交流の場にしようと年に一度開く催し。年々協力者の輪が広が
り、毎年約3000人が来場してにぎわう。

ことしのテーマは「つながる心 広がる笑顔」。ステージでは、支援学校の生徒や共同作

業所のメンバーが次々と和太鼓やダンス、歌などを発表した。このうち、紀伊コスモス支援学校の生徒でつくる「夢コスモス」は、軽快な音楽に合わせて力強いよさこい踊りを披露。40回を記念した藪下将人さんのライブもあった。



迫力あるよさこい踊りも

会場には、支援学校の生徒たちの絵画や工芸作品を展示。作業所による雑貨やパンケーキなどの販売もあり、大勢が買い求めていた。

田中秀樹実行委員長（64）は「『障害のある人が主人公になれるように』と、自らで企画・運営し、皆さんの支えがあって40回を迎えられました。実際に障害者とふれあい交流する中で、みんなで社会をつくっているのを感じ取ってもらえるとうれしい。今後も10年、20年先を見据え、

誰もが住みよく優しい地域づくりを進めていきたいですね」と話していた。

冬季競技選手育成 スペシャルオリンピックス岐阜

岐阜新聞 2017年03月07日



スキーマの基本を習う競技者(左)＝郡上市高鷲町ひるがの、ひるがの高原スキー場

◆3年後、全国大会目標

知的・発達障害のある人のスポーツを通じた社会参加を支援する「スペシャルオリンピックス日本・岐阜」(岐阜市、高橋睦会長)は今年から冬季プログラムを開始した。競技はスキーとスノーシューで、1月から月1回、郡上市のスキー場でトレーニングを行っている。関係者は3年後に開かれる全国大会に選手団を送り出そうと意気込んでいる。

スペシャルオリンピックスは1968年に立ち上がった国際スポーツ組織。日本では94年に国内本部が発足、岐阜では2009年からプログラムが始まった。現在、障害者の競技者、公認コーチ、ボランティアスタッフら約50人が所属。岐阜市や関市で陸上、フライングディスク、ボウリング、卓球のプログラムが行われている。今年は初めて冬季のプログラムを取り入れ、3年後の全国大会出場を目指す。

今月5日、郡上市高鷲町のひるがの高原スキー場で3回目のトレーニングを実施。岐阜市近郊や郡上市から参加した高校2年～21歳の5人の競技者は、ボランティアスタッフからマンツーマンで基本を教わった。

スペシャルオリンピックス日本・岐阜の木村竜二事務局長(52)は「支援者も増え、スキー場や宿泊施設の協力も得られ、少しずつ形ができてきた。岐阜は近隣県よりも競技者がまだ少ない。認知度を高めていきたい」と話す。競技者とともにボランティアスタッフを募集している。問い合わせは同事務局、電話058(230)1616

発達障害 理解深めて 札幌市の冊子好評 良好な関係作り、漫画で事例紹介 /北海道

毎日新聞 2017年3月7日

札幌市は、発達障害への理解を深めてもらおうと『『虎の巻』シリーズ』と題する冊子を作成した。職場や学校などで発達障害の人たちと良好な関係を築けるよう、漫画で事例を紹介。7万9000冊まで増刷を重ね、市の担当者も予想しなかった好評ぶりだ。

市は2005年から、発達障害者の就労支援に取り組んできた。当初は発達障害の成人に関する情報が少なく、事業者の間に誤解があった。能力がありながら職に就けない状況

を改善するため、事業者向けに冊子を作成する案が浮上。「文章だけでは、気軽に読んでもらえない」と、漫画を活用することにした。

冊子では発達障害者の特性について具体的な事例を集め、「臨機応変が苦手」とされる部分を「専門性が高い」という長所として生かす方法などを紹介している。

10年に完成した第1弾「職場編」では、パン店で働く男性が登場。さまざまな仕事を頼む上司に困惑する発達障害者が、一つの仕事に集中すれば素晴らしい成果を出せることを示した。

その後に作成した「学校編」では、先生の曖昧な言い方を理解できず、授業のペースについていけない女子生徒が、具体的な指示によって積極的になる様子を描いた。

ほかに「子育て編」などもあり計5シリーズで、それぞれA5判の20ページ程度。市の施設で無料配布しているほか、企業などにも渡している。

読者は事業者から教員、親へと広がり、インターネット上でも話題に。場面設定が細かいこともあり、市には「役に立つ」「共感できる」といった声が寄せられているという。

市障がい福祉課の福井智恵係長は「どのように発達障害者と接すればいいのか悩む人もいる。さらに続刊を検討したい」と話した。市外の人が読めるよう、市のホームページでも冊子を閲覧できる。

知的障害男性にラリアット、暴行容疑で施設職員の男を逮捕 防犯カメラに映像

産経新聞 2017年3月7日

兵庫県加古川市内の障害者支援施設で、知的障害のある入所男性の胸にプロレス技の「ラリアット」を打ち付ける暴行を加えたとして、加古川署は6日、暴行容疑で姫路市香寺町溝口、障害者支援施設職員、大塚拓弥容疑者（26）を逮捕した。「間違いない」と容疑を認めているが、同署が動機などを調べている。

逮捕容疑は、昨年9月26日午後7時55分ごろ、加古川市志方町大澤の障害者支援施設「ハピネスさつま」で、入所男性（44）の胸を左腕で殴る暴行を加えたとしている。男性は殴られた反動で尻もちをついたが、けがはなかった。

同署によると、昨年10月以降、県などに匿名の投書が寄せられ、県が12月に調査を実施。防犯カメラには大塚容疑者が暴行を加える様子が映っていたという。

同施設によると、大塚容疑者は平成27年4月から勤務。石塚三智子施設長は「家族には大変申し訳ない。再発防止に努めたい」と陳謝した。

“褒めて伸ばす”好評 笑顔あふれる「ほめ達検定」 大阪日日新聞 2017年3月7日

部下や社員、子どもを一方向的に叱るのではなく、「褒めて伸ばす」「大阪発」の取り組みが広がりつつある。大阪市西区に本部を置く「日本ほめる達人協会」（西村貴好理事長）が主催する「ほめ達検定」は、これまでに企業関係者や個人など3万人以上が挑戦。褒めることで信頼関係を築き上げた企業は、実際に業績も伸ばしているという。



「ほめ達3級検定」で、隣人の良い所を見つけ褒め合う「褒め褒めリレー」に取り組む受講者ら＝1日、JR新大阪駅前の新大阪丸ビル別館

3月上旬、JR新大阪駅近くのビル。「ほめ達検定3級試験会場」の張り紙がある会場は、用意された60席が埋まり、熱気に包まれていた。

■「心の内戦」

検定は実技を交えたセミナー形式で行われる。「『褒める』とは相手との違いを認め、言葉に出して伝えること。考え方を変えるだけで皆が幸せになれる」。西村理事長（49）は褒める

意義を説く。

同協会は、過労死やパワハラによる自殺者が後を絶たない現状を踏まえ、2011年に設立された。西村理事長自身、9年前に学生時代の後輩を自殺で失った。「現代人は“心の内戦”を抱えている。この異常な社会を変えることができないか」。全国でセミナーや検定を開き、「褒める人」「他人を認める人」を増やすことで、自殺者を減らそうと努めてきた。

検定では、自分が大切に思う人の良い所を2人一組で発表。隣に座った人を褒めるリレーも行い、会場は次第に笑顔であふれていく。参加した豊中市の経営者、久保幸一さん（49）は「普段はつい、社員の悪い所ばかり探してしまう。良い所を見つけて伝え、社員も自分も輝かせたい」と話した。

■2割アップ

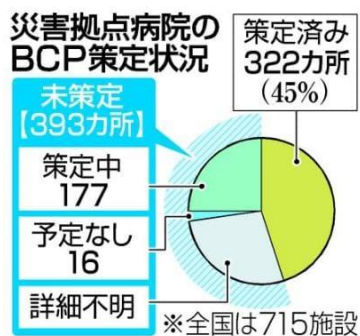
「褒めて伸ばす」社員教育は、大阪市に本拠を置く外食大手のほか生命保険会社、自動車学校などが取り入れ、同協会によると社員のやる気が向上し売り上げが2割アップした例もある。自治体では鳥取県庁が職場づくりで実践。平井伸治知事は「公務員は叱られると縮こまるが、褒められると脳のドーパミンが出て前向きに進む」と効果を認める。

日本の企業では戦後、「先輩や上司の言うことは絶対」という体育会系的な意識が根付いてきた。だが、近年はIT化の進展もあり、若者を中心にコミュニケーション能力の低下や“打たれ弱さ”も指摘される。上下関係は横並びの関係性になり、「叱る」だけでは組織が維持できない実態もある。

滋賀県東近江市の建築会社では、朝礼で社員同士が褒め合うなど認め合いを実践。事務を担当する北村千秋さん（48）は「普段は無理を言われても、朝礼で褒められると『認めてくれているんだな』と悪い気はせず、協力的な気持ちになる。会社の雰囲気も良くなった」という。

西村理事長は「時には叱ることも大事だが、上司から常にマイナスの言葉を浴びせられると心のシャッターが閉ざされ、何を言われても心に入ってこない。普段から意識して相手の良さを見いだして伝え、信頼関係を築いておくことが重要」と話す。

被災時の医療継続、策定5割未満 全国700災害拠点病院 共同通信 2017年3月6日



全国に約700ある災害拠点病院のうち、災害時に医療活動が続けるためのマニュアルを整備済みの施設が45%にとどまることが6日、共同通信の調査で分かった。病棟の被災や、ライフラインの途絶で多くの病院が機能を失った東日本大震災を教訓に、国はマニュアル作りを促してきたが、震災から6年たっても十分に進まない現状が浮き彫りになった。

マニュアルは被害を最小限に抑えるための事前の備えや、平時の機能を速やかに取り戻すための段取りなど、災害時の中長期的な対応を盛り込むもので事業継続計画（BCP）と呼ばれる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行